



教会で祈りを捧げる君に惹かれて…… 台本者：咲夜

dots

「ああ、貴方でしたか。また神に祈りを？」

「……………そうですか。こんなにマメに教会に来ている貴方にはきっと神の御加護がありますよ。」

「神はいつも見守ってくれてるのですから。」

「でも、もうすぐ日が落ちます……貴方は暗くならないうちに帰らないと。」

「……………私ですか？…………私は夕陽が映し出すこの教会のステンドグラスが好きでね。此処は時の流れがゆっくりで……」

「思いを相手に直接伝えてみてはいかがですか？」

「いつも、このステンドグラスを眺めながら……自分の感情や……日々の出来事を整理するんです。」

「貴方は良く此処で祈りを捧げてますよね？……………え、好きな方との成就…………です……か…………」

「いや、良いんじゃ無いですか？　どんな事でも祈りを捧げる者に神はお力を貸してくれるものです。」

「でも貴方は可愛らしい人なので……きっと大丈夫ですよ。」

と……ちょっと待って…………落ち着いて、…………あの……
ゆっくりで良いから……話してくれますか？」

「ふふ、貴方の未来に笑顔が溢れますように私も祈つてお
きましょ。」

「あ、そういうえば、此処の教会は結婚式にも使えるんです
よ。いつか素敵の方と人生を共にする決心が出来たら是非……」

「…………いいえ、凄く嬉しいですよ。…………本当に相手は私
で良いんですか？ 私は貴方が思う程紳士でもありません
よ？」

「私ですか？ ……私もお相手が見つかって、その方とい
つか……なーんて、先ずは御相手を見つける所からですが
（笑）」

「なら、ちょっとこっちに来てください。…………さあ、
お手をどうぞ？」

「…………え？ ……私じゃダメですかって…………えつ

「……」に座つて？…………神の前では嘘なんてつけませんから。」

(相手の正面に回れば一度ゆっくり深呼吸して片膝着いて)

「…………ありがとう。…………ねえ、目を閉じて……」

(ゆっくり近付けば相手にキスして)

「誓いのキス……ですね。」

「……私も貴方の事が好きです。…………真剣に祈りを捧げる姿、私に挨拶する時の優しい微笑み、……気が付けば此処に来る度に貴方を探していたのは私の方でした。」

「さあ、暗くならないうちに帰りましょう？　送つて行きますよ。」

「……貴方の事をもっと知りたい。私の事も知つて欲しい。

……貴方が好きです。一緒にこれから的人生、苦

(ドアを開ければ雨に気が付き)

「さつきまで降つて無かつたのに…………結構降つてます

ね。もう少し雨が弱まるまで中に居ましょうか。」

(相手との距離を詰めて相手にキスして)

(ドアを閉めて鍵を掛け※SEあれば)

「ふふ、言つたでしよう? そんなに紳士じやないつて。
」

「……」に座つて下さる。…………寒くないですか? ちょっと
と待つて…………確かこの辺に…………あつた。」

「まあ、もしかしたら神様が…少しゆっくりしていきなさ
いつて…雨を降らせたのかもしませんね」

(相手を座らせればブランケット取りに離れ)

「ねえ…………もつとキスしても良いですか?」

「……はい、このブランケット使つてください。…………
ねえ、もつとこつち…………おいで?」

(相手にキスすればどんどんキスを深めて)

「……そんな顔は初めて見ました。凄く可愛くて色っぽい顔……」

「……私の膝の上に来てくられますか？……うしてたら少しでも貴方を感じれます。」

(再び相手にキスして)

(相手を抱きしめてキスして)

「恥ずかしい？……ふふ、大丈夫。貴方はとても魅力的ですよ。」

「はあ……これ以上は我慢出来なくなつてしまいそうです。……貴方も私が欲しいと思つてくれてるんですね…」

(相手の耳元に唇寄せて)

「凄く嬉しいです。……あの、やっぱり此処じやダメですか？」

「……此処が神聖な場所とわかつっていても、今すぐ貴方を感じたくなる程に……」

「大丈夫。きっとこの雨が全て隠してくれますよ……」

(相手の胸を舌で責めて)

「貴方の胸、甘い訳無いのに……甘く感じます。」

「嫌だつたら言ってくださいね? ……柔らかい胸……」

「服越しなんてもどかしいですね。」

「食べてしまいたくなる……」

「服の裾を咥えててくれますか? ……流石に此処で貴方
を裸にする訳にはいかないので…」

「はあ……可愛い……」

「反対も…………」

「……何だか自分から触つて欲しいって強請つてるみたい
ですね。……ふふ、咥えてるから話せ無いですね。」

(反対の胸も舌で責めて)

「気持ちいいですか？　まだ指で上下になぞってるだけなのに…」

「ねえ、下も触つて良いですか？　……ふふ、スカートで隠れてましたけど……下着少し濡らしてしまいましたね。」

—

(相手に見せ付けるように指先舐めて)

「これ以上汚してしまう前に脱いでおきましようか。」

「ほら、見えますか？　……少し触つただけで私の指がこんなに……ん、貴方の味がする。」

「……ダメですよ、自分で脱ぐなんて。私が脱がせてあげますから貴方は一度膝から降りて横に座つて下さい。」

「もっと欲しい……舐めて良いですか？」

「脱がせますよ…………そのまま足を広げて…………恥ずかしい？　暗いし私以外は誰も居ませんから……」

(体制を変えてクンニ開始)

「ん、…………美味しいですよ…」

「我慢？　出来ると良いですね。」

「ふふ、いっぱい奥から溢れていますよ…………」

「舌だけじゃ足りませんか？…………指も…………ね？」

(責める手を激しくして相手がイクまで続けて)

「ふふ、…………あーあ、我慢…出来ませんでしたね。そんなビクビクして…気持ちよかつたですか？」

「あー、中凄い…トロトロ……………」

「貴方の気持ちいい所は……此処かな？」

(相手にキスして)

「ふふ、可愛い。……イきそう？…………」んな神聖な場所で…神様に見られながら私にイカされるんですか？」

「可愛かつたですよ。…………今すぐ貴方とひとつになりたいです…………とはいえ…………」んな冷たくて硬い床に貴方を寝かせるのも…………」

(近くの鞄からゴム出せばベルトに手をかけ準備して※ベルト外すＳＥ等はおまかせします。)

「…………そうですねえ…………私の上に座つてなら大丈夫ですか？」

「これで大丈夫です。…………こっちに来て？　私の膝の上。」

「対面座位なら密着も出来ますし……貴方を床に寝かせなくして済みますから……あ、勿論ゴムはしますよ(笑)」

「ゆっくり腰を下ろして……大丈夫ですか？」

「なんでつて……男性は持ち歩くのがマナーなんです(笑)」

「首に腕回して……そう。…………ん？　キスなんていくらでも……」

「私も急に必要になる事なんて無いと思つてましたけど……今はちゃんと持ち歩いて良かつたと思つてますよ。」

(相手にキスして)

「いいように動いて下さい……」

「はあ……根元まで入った……痛くないですか？」

「少し慣れるまでキス……しましよう？」

「私も気持ちいいですよ……熱くて……締め付けてくる……」

（深くキスしてるのでゆっくり腰動かし）

「はあ、そんなに締め付けられたら私も余裕無いんですけど……」

「…………すみません、私の方が我慢出来ませんでした。」

「気持ちいいですか？…………下から突き上げられるの……」

（少し悪戯っぽく笑い）

「ふふ、可愛い声…………大丈夫ですよ。どんなに声が出て
も外の雨の音が消してくれます。」

「ゆっくり動けますか？…………そう、…………自分が気持ち

「はあ…………そろそろ私もイキそうです……受け止めてくれますか？」

「ん、好きですよ。…………はあ、…………イ、ク…………」

「これが夢じやないつて実感出来るまで…………今夜は貴方と離れたくないんです。」

「好きですよ。…………貴方の事が大好きです。」

(乱れた呼吸が落ち着くまで抱き締めて)

(相手にキスして)

「初めてがこんな場所で……すいません。我慢出来なくて…………」

「少し休んだら…………私の家に来ませんか？」

教会で祈りを捧げる君に惹かれて…… 台本者:咲夜

発行日 2023年12月15日

著者 dots
<https://www.pixiv.net/member.php?id=100027102>

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
